

第1日目

7年前に40年務めた会社を退職し、祖先と父母の実家のある、そして私が少年時代を過ごした甲州で余生を過ごそうと決心して山梨市の片田舎に居を構えた。自分では甲州について何でも知っていると思っていたが、学生時代を含めて約半世紀不在だった後の現在の甲州を見た時、以前感じていたものと違う甲州を感じた。論文というおこがましい名前を付けた与太噺を恥ずかしげもなく書いたが、長ったらしくなったので、管理人殿にお願いして何回かに分けて掲載して頂くことにした。

論文「甲州人氣質」

第1章 緒論

本論文（「よたばなし」と読む）は甲州人氣質について人類学、社会学、歴史学に関して全く知識のない、そして学者でもない筆者が、独断と偏見に基づいて考察した学術的には全く価値のない論文である。

筆者自身は甲州人である。以下に述べる甲州人の定義に従うと、社会的分類上の第2種に属する、所謂「出戻り甲州人」である。

一般論として、日本を出て海外に住み、その国の文化の中に身を置いて第三者的な目で日本を見た時に、今まで自分が感じていた日本が、その国との対比において随分違って見えるのと同様に、筆者がまだ下記に述べる甲州人の分類上、第1種甲州人だったころ感じていた甲州人氣質と、今感じるそれとは、出戻りなるが故に、他国（例えば隣国の信州）との違いが明確に理解できるのである。他国人と甲州人の気質の違いが何に起因し、どのように違うかを知り、甲州人とどのように付き合っていけばよいのかを考察してみたい。

第2章 甲州と甲州人の定義

1. 言葉の定義

ここで使われる言葉について、混乱を避けるために定義しておく。

国—甲斐の国の事である。甲州と同義語である。

外国—甲州以外の日本国内の国である。例えば信濃の国とか越後の国などである。

海外国—日本以外の国である。例えば米国、独逸、和蘭、英国などである。

筆者—この論文を書いている者である。私、小生、俺などいろいろの表現法はあるが、格好をつけて自分のことを筆者と呼ぶことにした。

2. 甲州の地理学的定義

先ず甲州の地理学的な位置づけであるが、武田信玄公の時代まで遡ると現在の

信濃の国、駿河の国や越後の国の一部まで甲斐の国となり、色々と異論が出るので、甲州の地理学上の位置は現在の山梨県と同一の地域とする。境界線上にある世界文化遺産の富士山の頂上については駿河藩とその帰属について係争中であるが、安易に領土問題を譲ることは国家の威信にかかわることなので、何処にあるか分からない古文書の記載通り甲斐の国の領分であるとする。

序に、地政学的に甲州を見ると、海に面していないので海洋国家ではもちろんない。マッキンダーのハートランド理論に従うと、信濃の国と同様に日本の内陸国家であり、海を求めて国家を拡張しようとする野望を抱く傾向がある。これが甲州人の外向志向、反対の見方をすれば劣等感となっているのである。

3. 甲州人の分類

この論文の対象者たちは、甲斐の国に住み県民税を払っている人達が対象となる。禁治産者または極貧のために県民税を払っていない輩（やから）は分類上、甲州に住んでいても、いずれの甲州人の分類にも属さないのは自明の理である。かと言って余り厳格にこれを定義すると、甲州在来の猟犬である甲斐犬と同様、純粋な甲州人の 85 万県民の中で占めるパーセンテージが下がってしまうので、下記のように分類してみた。

第 1 種甲州人—「土着甲州人」

この種族は少なくとも明治維新以前から祖先が甲州に居住し、代々甲州で生計を営んできた種族である。その身分が士農工商のどの身分であろうとも甲州人は甲州人として正當に土着甲州人として認める。85 万国民の内の約 60%がこの種族と思われる。

学校を卒業して、長期間(5年以上)国外に一度でも出て生計を営んだり、夜逃げや駆け落ちをした者は第 1 種甲州人とは言わない。但し、甲州に異国文化を取り入れるために有名大学やろくでもない学校に通うため、若しくは、はかない恋に現をぬかし短期間(5年未満)甲州を離れ、その後甲州に帰って生計を営んだ人達は、おまけで土着甲州人と認めてやるのに吝かではない。

第 2 種甲州人—出戻り甲州人

本来は甲州人であるが、生計のためや歪んだまたは清い愛情、つまり駆け落ちなどのために一度国外に出て、国外の空気になじめないとか、清い愛情が蜃気楼だったことを知ったとか、食い詰めて行き場所がなくなったとか、借金取りに追われたとか様々な理由で甲州に帰還した人種で、土着甲州人より身分は低い。海外国からの出戻りは身分の高低に影響を与えない。85 万国民の約 20%がこの種族と推測される。実は、筆者もその一人であるが、身分の低い割にはデカイ面をしている。

第 3 種甲州人—外来甲州人

2、3 世代前までは甲州以外の地域におり、第 2 種甲州人の転出理由と反対の理由で甲州に移り住んだ人達及びその子孫である。甲州弁を真似て話すことによって甲州人の仲間として受け入れて貰いたいというささやかな願いは理解するとしても、人種的には、祖先が武田信玄公に敵対した人種の子孫であり、たとえ現在甲州のために貢献しているとしても人種的には異民族の子孫として身分は第 2 種甲州人より更に低い。人口比率は第 2 種甲州人と同程度の 20%と推測される。

第 4 種甲州人—転出甲州人

祖先は第 1 種甲州人であったものが、大して金にもならない経済的な理由とか、殆ど報われぬ愛情のためとか、甲州の借金取りの追及から逃れるなどの理由から甲州に未練を残しながらも故郷を離れた哀れな甲州人を言う。本人の申し出によって、素行の正しい者だけを名誉甲州人として仲間入りを許す。この種族には名誉甲州人の称号は与えるが、県民ではないので 0%である。

第 1 日目終了

第 2 日目

第 3 章 帰納法による甲州人氣質の分析

この章では筆者が体験した様々な事象から帰納法により甲州人の思考形態およびその傾向を分析するものである。

体験談—1

半世紀にわたる放浪の末、故郷の甲州に流れ着いた筆者を、小言ひとつ言わずに迎えてくれたのは高校時代のバスケの仲間たちだった。早速筆者を仲間たちで作る鶴城朗球会なる結社に紹介してくれ、半ば強制的に彼らが毎月 1 回開催している無尽会に加入させられた。この結社の会長は典型的な第 1 種甲州人で甲州弁を流暢に話す（これ以外の言葉を知らないと言った方が正しい）。「おまんも国にけえってきたんだから、無尽にへえれし（和訳「君も故郷に帰ってきたのだから無尽に加入したまえ」）」と言うことで、何処でやっているかを聞いたら「後輩を武田信玄公の銅像の前で待たせているから、そこへこうし（和訳「来なさい」）」と言って電話が切れたが、国を離れた半世紀前にはそんな銅像はなかったの迷いに迷ったが、甲府駅の駅員に聞いたらわざわざ駅の階段の所まで下りてきて銅像を指さして教えてくれた（観光山梨万歳）。

帰納される甲州人氣質—1 仲間意識が強く結束が固い

同

—2 無尽がやたらと好きである、加入している無尽の数

がステータスシンボルになっている

同 3 見知らぬ人にも親切である

注) ここまでは甲州人の良い面を強調しているが、そんなに甘くはない。

体験談—2

無尽でどんなことをするのか興味津々で参加した。甲府駅前の居酒屋に集まった総勢 16 名のバスケット仲間は、同じ釜の飯を食ったという意識からすぐ打ち解けて、村八分にもされずに仲間に入れてくれた。仲間たちの職業も様々で、退職した中学の校長で現在農業指導員、不動産会社の社長、新聞記者上がりの半農、百姓、税理士、喫茶店の雇われマスター、寺の住職、建設機械の操縦士、農協のOB、得体の知れないセールスマン、パチンコ屋の専務、サラリーマン、風来坊、筆者を除く殆どの人が第 1 種甲州人だった。後でわかったことだが、無尽会の意義は月に 1 回集まって居酒屋の女将(おかみ)の作るべらぼうに美味しいオゴッソウ(和訳「ご馳走」)を食い、酒を酌み交わしながら親睦を深めるとともに集まれなかった人たちやそのほかの仲間たちの消息を確かめ合うこと、それにその時々非常にローカルな話題を、口角泡を飛ばして怒鳴りあうことだと分かった。

所が、半世紀も甲州を離れていると、甲州の事情は殆どわからない。そこで話し合っていたことは、多分こんなことではないかと想像するが自信はない。

「今日自分の土地を売りたいと言っていた親父は昭和村の大地主で、その娘が白根町に嫁に行っていて旦那と折り合いが悪く、膠原病になっちゃったと(和訳「なってしまったそうだ。」)。ところがその旦那が自分の嫁さんの相続分の金を払わんと、義父の土地を売っちゃあいけんと言っているため、今日菓子折りを持ってその旦那の所に行ったさー。不味いことに折り合いの悪い嫁さんがいて、大喧嘩になり、困ったから郡内(「ぐんねえ」と発音する、富士山の根っこの寒村)の県会議員の娘と結婚している白根町の町長に仲介を頼んだら、六郷町に頼んだ方が話が早いと言うので、また菓子折りを持って云々。」(この「云々」の部分甲州全県の村々の有力者の間を駆け回る、1 時間にも及ぶ大冒険談であったが、話があちこち飛ぶし地名と人名の区別がつかないので結論は分からなかった。) 驚いたことに、筆者を除く 15 名はその話が全部ではないとしても理解できるらしいことに、興味より恐怖を感じた。18 歳までしか甲州にいなかった筆者が今後彼らとまともに付き合うためには、85 万人の甲州人一人一人の職業、出身、経歴、親類縁者、持病、素行、派閥、所属政党等々全部暗記しないと村八分にされること間違いない。

帰納される甲州人氣質—4 ほとんどの甲州人の人脈に精通している

体験談—3

6 年前から高校の同窓会に出るようになり、高校時代には話をしたこともなかった同級の女性と性別を意識せずに話が出来るようになって、照れ隠しに「あの

人を知っているけ？」などと話している内に「何だ、貴女は俺の遠い親戚ジャン。」と言う方が3人も現れた。高校当時、当然、筆者は第1種甲州人だったから、その気になれば親戚を探すことなど訳もなかっただろう。その女性の当時の娘時代を想像して、見合いしていたらどうなただろうかと下らんことを考えて少しドキドキした。

帰納される甲州人氣質—5 甲州人全員が親戚関係にあると思われる

体験談—4

山梨の交通ルールは特別なのかも知れない。十字路で直進すべく信号待ちをしていて、信号が青に変わって走り出したら、向かい側から来る右折車が筆者の車の前を横切りながらクラクションを鳴らして疾走して行った。甲州以外の国でこのような狂人じみた運転を見ることは稀であるが、甲州ではおばさんまでもが右折車優先と信じているらしい。ウィンカーを出さずに突然曲がるのは当たり前前。片側一車線の60kmの制限速度の高速道路を走っていると(笛吹市から山梨市に繋がる西関東自動車道路は料金を取らない、たった8kmの高速道路である)後続車が筆者の車の後ろにぴったりくっついて、多分スピード違反をして早く行けと言う意味だと思うが、ライトをピカピカやってくる。それでも時速70km位に上げて走っていると今度はクラクションをうるさく鳴らしてくるが、直近の一台だけでなくその後ろに続いている車までもがクラクションの合奏を始めるので、恐怖を感じた。

帰納される甲州人氣質—6 甲州には特別な交通ルールがあるらしい

体験談—5

甲府の銀座にうまいハンバーグを食わせるレストランがあると言うので、同期の女性に所在地を聞いた。彼女曰く「ええ、知っているわよ。そのレストランの向かいに産婦人科があって、そのお医者さんには娘さんと二人の男の子がいて3人とも一高の先輩なの。長女は東京の大学を出てお医者さんにお嫁に行ったそうよ。長男はその産婦人科を継いでいたの。次男は私たちより2年上のちょっと変わった人で赤い靴下をはいて学校に通っていたのを知っているでしょう？」筆者も釣られて「いや、知らんけど。」彼女の話はまだ延々と続き、「まあ良いわ。ところがその長男はある朝ジョギングをしていて車にはねられ、亡くなってしまったの。」流石に温厚な筆者でもレストランのありかとその産婦人科医の関係が解らなくなったので「ところで産婦人科の話は分かったけど、じゃあその産婦人科は何処にあるの？」と聞いたら、「あら、最初に言ったでしょう？ハンバーグの美味しいレストランの向かいよ。」

ハンバーグを食わなくても死にはしないと考え、それ以上の追及は止めた。

帰納される甲州人氣質—7 甲州人はその土地の住民の詳細な情報を熟知している

第2日目終了

第3日目

体験談—6

聞いた話である。山奥に耳の遠いお爺さんとお婆さんがいた。二人の会話。

婆「お爺さん、今聞こえたのは鉄砲の音け？」

爺「何だとー？ばーか、何を言ってるでえ、ありゃあ鉄砲の音ジャン。」

婆「あー、ほーけ。おりゃあまた、鉄砲の音かと思ったサー。」

帰納される甲州人気質—8 甲州人は喧嘩をしているように言葉が荒っぽい、「なんだとー」、「ばーか」などは日常語である

体験談—7

筆者の居住地の近くに、学生帽に着ける学校の徽章が金平糖の形に似た高校がある。この高校は伝統的に関西方面へ修学旅行に出かけるが、かの地においても金平糖の学校として有名である。その理由は滅法言葉が荒く喧嘩が強いからだという。京都などの観光地は県外からの訪問者を歓迎する意味から余所者を見ると親しげに「あんたら何処から来なはった？」と聞く。ところが金平糖は自分らとまるきり違う言葉に戸惑い、仲間に「あいつらが言っているのは、何だとー？」と聞くと仲間は「ばーか、そんなことも分からんのか？あいつらはおまんのことをアホだと言ってるずら。」などと話している。それを聞いていた京都の人は「何だとー、とは何だ。それにワイらのことを何度もばーかと言うてはりました。」と言うことになり喧嘩になる。双方入り乱れて喧嘩をしていると、金平糖の先生がきて、喧嘩の仲裁に入り「てめえら、喧嘩なんかしちよ(和訳「するな」)。」と言いながら、結構相手方を殴りつけたりしながら、仲裁(「えこひいき」と読む)するらしい。確かに優雅に抑揚をつけて話す京都弁を金平糖が聞いても理解し難いのは想像できる。

「なんだとー。」は相手に向かって言っている言葉ではなく、自分の仲間に意味を確かめるための「なんて言っているの？」という疑問形であり、相手の言葉に対して反発しているのではないのだが、京都側にすれば、喧嘩を売られたと解釈されよう。また、甲州人にとって「ばーか」は否定語の一種、「いいえ」と同義語であり、相手を軽蔑する言葉ではないが、そんなことを知らない人種には、軽蔑または侮蔑の言葉と受け取られても当然である。

帰納される甲州人気質—9 甲州人だけにしか通じない意味の全国共通語がある

体験談—8

甲州に移り住んで2-3日経ったある日、農家の親父と思しき人が訪ねてきた。玄関に出ると、「私は近所に住む者ですが、貴女のお父さんに生前お世話になっ

たので、家で採れた野菜を食ってください。」と言って食いきれないくらい沢山、それも高価な野菜をどっさり頂いた。父が亡くなったのはもう30年も前で、生前、一時近くの大学で非常勤講師をやっていたことは聞いたが、そんな昔のことはとうに忘れていたのにその方は覚えていて、息子である筆者に贈り物をしてくれたのである。

体験談—2 で書いた無尽会に毎月出るようになってから、明野村に住む後輩が毎回べらぼうに美味しいパンを焼いて持ってきてくれた。1, 2度なら有難うで済ませられるが、毎月となると少々負担に感ずるようになって、丁重に辞退申し上げたが、その気前の良さには驚かされる。先日は米や、リンゴや漬物まで頂いて冷蔵庫が満タンになった。

帰納される甲州人気質—10 贈り物をするのが好きな人種である

体験談—9

田舎の中学の同窓会をやろうということになり、近所の同級生から「おまんももうここに住んでいるずら？（和訳「貴方もここに住んでいるのでしょうか？」）じゃあ、おまんも幹事をやれし。（和訳「じゃあ、君も幹事をやってください。」）」と言うことになり、同級生8人の幹事の一人となった。最初の集まりで感じたが、昔はワイワイやっていた悪たれ小僧のなれの果てであるその8人の雰囲気何かおかしい。

出席者は、会長のお寺の住職、筆者の他に、百姓2人、地元の市役所OB、先生のOB、信金のOBそれに県庁のOBであるXだった、中学時代は筆者にぺこぺこしていたあまり勉強のできなかったXが、結構デカイ面をしていて、会長のお寺の住職と筆者を除く者たちが何となくXにぺこぺこしている上に、「Xさん」とさん付けで呼んでいる。会の進行は本来会長である住職の仕事であるが、Xが出しゃばって何でも仕切ろうとする。会場である田舎の居酒屋のメニューもXが一人で決めているので、「こんなギトギトしもんばかりじゃなく、煮物や野菜もいってくれ。その上俺は運転だから酒でなくてウーロン茶にしてくれ。」と云ったらXにギロツと睨まれた。トイレに行ったとき一緒についてきた先生のOBが「おまん、あんまりXには逆らわん方がいいぞ。ここじゃあ県庁OBは偉いんだから。」と忠告された。県庁が何だ、社長が何だ、おりゃあ独立独居老人だぞ。

筆者だけ「さん付け」でなく「X。」と呼び捨てにするし、彼に対して「ため口」をきくので、県庁以外に何となく頼りにされて、面倒くさい仕事を押し付けられた。

帰納される甲州人気質—11 県庁職員またはそのOBに一目置いている

第3日目終了

第4日目

第4章 甲州人氣質の地理的、社会的、歴史的考察

甲州は他国との比較において種々の相違点がある。その相違点が甲州人氣質に与える影響を考察する。

1. 甲州人氣質の地理的考察

甲斐の国は周囲を山に囲まれていて、大部分の地域が熊、鹿、タヌキなどの生息地であり、人間の生息地は盆地の底の部分のわずかに国土の25%程度である。そのため甲州人の顔つきはタヌキや熊と交配したのではないかと思われる顔つきをした人もいるし、角の生えた女性も見かける。郡内地方には猿に似た甲州人が多いそうだ。最近良くハイブリッドという言葉聞くが、本来この言葉はイノブタのような2種類の動物の交配によって出来た「あいのこ」の事だが、甲州ではそんなハイブリッド人間をとときどき見かける。この場合は血統を議論する場ではないので本題に戻ろう。

平野部が少ないということは農耕面積が少なく、人口も少ない。その上周圍を山に囲まれているため、外国との交流もままならず、甲州独特の文化が生まれたとしても頷ける。狭い国土の中で争いなど起きようがなく、反対に信玄公を頂点とするまとまった社会を作るための交流の場として地域のコミュニケーションを重視する無尽が重宝されたのはむべなるかなと言ふべきである。

狭い国土の中で獲れる米の石高も少ないので、水田でなくても収穫できる麦が生産され、ほうとうが主食になったとしても不思議はない。

猿や鹿などの食料であったブドウや桃などの果物を人間が横取りして、甲州の山々の裾野に広がる扇状地を利用して、野生の果物に改良を加え果物天国にしたのは地理的なマイナス要因をプラスにした甲州人の努力の賜物と思われる。

もう一つの甲州の地理的な特色はその安全性と温暖な気候にある。海に面していないということは津波の被害を想定する必要がない。水力発電所はあるが原子力発電所はない(立地条件が成り立たない)から、原発事故とも無縁である。周囲を高い山に囲まれているため台風の被害も大きくない。甲州が日本一日照時間の長いところであることは余りにも有名である。つまり居住環境が外国と比べて格段に優れているということである。

甲州の山を隔てて外国から隔離された甲州人は本来温厚な性格だったのではなかろうか。一般的に、島国のような外界から隔離された環境、例えばイタリアのシチリア島のようなところでは島民同士の結束が固い。マフィアはシチリア島出身者たちのファミリーで、たまたま違法集団となっているが、同郷の士として島を出てからも強い結束を保っている。同様に、周りを山に囲まれて外界から隔離された甲州人も、その外に出てからも結束は固く、明治以降甲州財閥と言われるような集団を作っていたのは隔離社会からの出身者達が同じような考え方を持っているのかも知れない。

このように本来穏やかな性格の甲州人を戦国の激闘の中に押しやったのは何かと考えると、先に述べた地政学的な劣等感、つまり山に囲まれていて海に対す

る志向が強いと言うことが言えるのではないだろうか。この事実は、甲州がマグロの消費量で日本一だと言うことから窺える。

2. 甲州人氣質の社会的考察

次項で述べる歴史的考察において、戦国時代の武将武田信玄公の威光を避けて考察を進めることは殆ど意味がない。

戦国時代の甲州の人口がどの位だったかは想像するしかないが、現在の人口の半分もいなかったと思われる。つまり40万人程度だったのではなからうか。

川中島の決戦などの国外遠征の際に武田軍は1-2万人の兵を率いていたということから計算される数字は下記のようになる(正確な動員数を記した文献が見つからなかったので筆者が勝手に想像した)。人口に占める男性の割合は概ね50%、戦闘可能年齢(18-40歳)の比率は男性の25%、つまり人口の12.5%が戦闘可能年齢である。40万の12.5%は5万人だから、遠征に参加した1-2万人は当時の成年男子の20-40%になる。これは驚異的な数字と言わざるを得ない。成人男子の10人に2-4人は戦闘に駆り出されたため、戦国時代の甲州は男手不足となり女性の負担は非常に大きく、負傷したり、疲労して帰って来た役立たずの夫に対して、家庭や田畑を守りぬいた女たちが、所謂「かかあ殿下」になったとしても不思議ではない。

一方、戦闘に参加した男どもは、国のために闘ってきたという自負心から、女房には頭が上がらなくても、無尽を開いては酒を飲みながら戦果を語り、武勇を自慢し、次の遠征のための準備で家庭を顧みることが少なかったと想像される。

戦国社会は武田信玄公を頂点とし、武田24将がその下に君臨するピラミッド構造をしており(専門用語ではヒエラルキーまたはハイアラーキーhierarchyと言う)強固な階級社会を作っていた。謂わば、これは一種の閉鎖社会であり、国外に通じないその社会のみに適用される独特の仕来り、掟、連帯感が存在していたのではなからうか。

武田24将はそれぞれの地域の豪族だったが、歴史上24将が揃って行動したという記録はないようである。いずれにしても、夫々の大将がその地域のトップとなるヒエラルキーを作り、その複合体が武田24将だった訳である。狭い国土の中で一地方の豪族とは言え同じ釜の飯を食って戦う戦士である24将はお互いに強い絆で繋がっており、お互いを助け合い横の連絡も密であったことは想像に難くない。前章で述べた甲州人全体が親戚関係であったのではないかと言う想像は、この強い横の絆に由来している。

山に囲まれた土地は罪人の流刑地に適しているもので、重罪犯は島流しとなって佐渡などに流されたが、軽犯罪者は甲州に送られたようである。信玄公より後の世では、国力の低下で流刑地となることを拒否するほどの力がなかったので、多くの流れ者が甲州に漂いついたと想像される。国定忠治、沓掛時次郎、伊那

の勘太郎などの渡世人が、追手からの逃げ場として山の中に入り込み身を潜めるのに適した海のない国の出身者であることは偶然ではないような気がする。つまり武田以降の甲州には渡世人を受け入れるような荒っぽい雰囲気があったのではなからうか？本件については次章で詳しく述べる。

3. 甲州人気質の歴史的考察

海外国の医者と土建屋と政治家が自分の職業がどの位古くから存在していたかを自慢しあっていた。医者が聖書を引合いに出し「アダムとイヴを作り出したのは医者だから、医者が一番古い職業だ。」と主張した。すると土建屋が「何を言うか。聖書にあるとおり混沌の（Chaos）の世界から陸地を作ったのは土建屋だから、医者より土建屋の方が古いのは当たり前だろう。」と自慢した。それを聞いていた政治家が得意満面で人差し指を振りながら「それぞれ、その混沌を作ったのは誰かな？」と言ったそうな。（閑話休題）

勿論甲州にも混沌の世界からオパーリン博士の「種の起源」のコアセルベートからアメーバを経て恐竜が跋扈した時代や、石器時代、弥生時代、古代を通じて戦国時代に推移して行ったのは事実だが、この論文の本題である甲州人気質を形成するうえで重要な役割を果たしたのはピテカントロプスペキネンシスでも弥生人でもなく、正に我が故郷の英雄武田信玄公だったのである。彼の存在があまりにも大きかったために、戦国時代の以降、徳川の世を経て明治、大正、昭和から平成になっても甲州人気質に影響を与えるような傑出した人物は出ていない。柳沢吉保が、与謝野晶子が、根津嘉一郎が、小林一三が、飯田蛇笏が、金丸信がいるじゃあないかと言う人もいるかも知れないが、彼らが甲州の有名人ではあることを否定するものではないが、甲州人気質に影響を与えたとするには余りにも小さな存在でしかない。

最近山紫会のHP上で米沢藩の上杉鷹山が多く登場しているが、鷹山が現在の米沢なり山形県で武田信玄公と同じような影響力を現在も維持し、尚且つ国民の生活にそれが生きているかという御意とは言い難い。武田信玄との対比において国民に与える影響は比べ物にならない。

武田以降僅かではあるが甲州人気質に影響を当てたと思われる人間に黒駒の勝蔵がいるが、詳しくは事項で述べる。

風林火山の中には出てこないが、「人は石垣、人は城」と云う文句があるが、武田の徹底したモットーは人の繋がりを重視したことである。現在まで生き続けている甲州人の人脈思想は、武田の歴史的な遺産であることは疑いようもない。

第4日目終了

第5日目

第5章 演繹法による甲州人気質の分析

第3章の帰納法による甲州人気質の分析によって、いくつかの特筆すべき甲州人の特徴が上げられる。

前章で甲州人気質を表すキーワードを太字にした。これらを纏めると甲州人気質とは下記のような特質を持っているのではないだろうか。この特質から演繹される個々の事象について考えてみたい。

- 人間関係を異常に大事にする
- 甲州人独特の文化を持っている

1. 甲州人は人間関係を異常に大切にする

第3章のいくつかの体験談から帰納される甲州人気質の特質として、それぞれの地域およびそこに住む人々の詳細な情報に精通していることが上げられる。その情報の入手経路はいくつもあるだろうが、定例的に開催される無尽会でのお喋りも主要経路の一つである。それに続くものとして、おばさんたちの井戸端会議、家庭内での他人の噂話などがある。ある見方をすれば、それ以外の話題が少ないと言うこともできるかも知れない。

職場での人間関係を通して、上司や部下、取引相手の人脈などの情報が多い人ほど出世が早いのが甲州の特色である。だからお金はかかってもできるだけ多くの無尽会に出席して人的な情報を集め、その知識を披歴することにより自分の地位も向上するのである。

狭い甲州社会において、自分の住んでいる地域を超えて他の地域の人たちの情報を持っているということは、それだけ広い視野を持っていることになり、他人からの信望も厚くなる。この人脈を大切にするということは戦国時代の武田の世から伝統的に引き継いだ甲州人のDNAにまでなっている。第4種甲州人が、国を離れた今でも自国にノスタルジーを感じているのは、自分もあの中に居て、その中の一員だったと言う自負のような感情だと推定する。

戦国の世で武田信玄公を頂点とするヒエラルキーが構築されたことを述べたが、その構造の頂点に近いほど社会的な地位は高く信玄公からの覚えも良いことになり、貧しい甲州の中での経済的な優位性も確保されたのではないだろうか。

県庁のOBが社会的に高い位置を持ち続けている事実は、いまだに甲州にはある種のヒエラルキーが存在し、官高民低の考えが現代でも生き続けている証拠である。

第1種甲州人に特にその傾向がみられるが、余所者に対してある種の排他性を示すのではないだろうか。この傾向は同族、同窓、同じ職場など自分の属するグループ以外の人たちに対して、よそよそしい態度をとるように思う。これを反対の面からみれば「私は自分のグループにだけしか忠誠を誓わないよ」と言う意思表示かも知れない。

しかし一方で他人のことを知るということはお節介にも繋がりがねない。事実第3種甲州人などは、余りに煩雑な人脈情報に戸惑っている人もいるくらいだ。

2. 甲州には他国にない独特の文化がある

武田信玄公の外国遠征以外に外国に出る機会の少なかった一般の甲州人は、他国の習慣に疎かったため甲州の中だけで通ずる掟や常識があったのではないだろうか。甲州独特の交通ルールや喧嘩のように話す甲州弁などはその典型である。

甲州の排他性については前項で述べたが、荒っぽい言葉のやり取りをする甲州弁は、他国の人々にとっては奇異に映るらしい。筆者も、若い頃同郷人と話しているのを聞いた外国人が、我々が喧嘩をしていたのではないかと心配したと言っていた。この荒っぽい言葉で話し合うこと自体が同族意識の表れであり、甲州の文化の一つである。

僅かではあるが武田信玄公以外に甲州人氣質に影響を与えた人として黒駒の勝蔵の名があげられよう。彼は清水の次郎長のライバルとして映画では悪役を演じているが、本来やくざの存在理由は外敵からその地方の住民(農民)を守る自警団であった。その経緯は黒沢昭の「七人の侍」やユルブリナーの「荒野の七人」に詳しい。彼が甲州東部を縄張りとする自警団として活躍している時、一宿一飯の恩義にあずかる渡世人がここを根城に喧嘩の助っ人や博徒として動き回ったが、やくざ者は商売柄言葉が荒い。今でも甲州弁に残る「ぶっさろう(和訳「殴る」)、「ぶんなぐる」(和訳「殴る」)「引っ叩く(和訳「叩く」)、「かっさろう(和訳「さらう」)などの甲州独特の接頭語をつけて他人を威嚇する言葉はここから来たものと思われる。言葉の悪さ、荒さでは、先に述べた金平糖の学校のある東郡(ひがしごうり)が甲州一だと思われる。勝蔵の影響はここにまで及んでいるのだろう。

外国人との付き合いが余りなかったということは、他人を疑うことより同国人を信用することの方が多かったのではなかろうか。貧乏のくせに贈り物をしたり、他人に対してやたらと親切なのは、同族だけの単一種族で長年暮らしていたためだと思われる。

5日目終了

6日目

第6章 結論

論文と言うには纏まりを欠いていることは否めないが、種々の考察から甲州人がどんな過去を持ちそれがどのように現代に引き継がれているかを述べた。ここでは甲州人の特異性について考え、甲州がどこに向かうべきかを考えてみたい。

1. 人種的特異性

筆者の感覚で第1種甲州人、土着甲州人の山梨県民に占める割合は60%と推測

したが、この数値は当たらずとも遠からずだと自負している。同一地域に先祖代々60%もの人々が住み続けること自体、異常と言わざるを得ない。それが何を意味しているかという点、筆者のささやかな経験によると、甲州は気候的にも、物価の面でも、また人間関係の面でも住みやすい環境にあることが上げられる。甲州の社会の中に入り込んでしまうと気心の知れた人たちに囲まれて実に心地よい。特に筆者のような第2種出戻り甲州人は今まで住んでいた地域との比較において「確かに甲州は住みやすい」という考えが強い。果物以外に大した産業もないどちらかという点貧乏国に住み続けるのは、外国に出た時の住みづらさを考えたら、「甲州の方がよっぽど良いや」と考える人が多いと言うことだろう。荒波に向かっても一旗揚げようとする者は、外国に出るだろう。その意味で第1種甲州人の比率が多いと言うことは、保守的な人間が多いと言うことになろう。

また、筆者の周りに住みついている第3種外来甲州人の多くは、仕事の関係で甲州に来て、居心地が良いのでそのまま住みついてしまったと言う人が多い。バブルの時代には甲州にも日本の大企業が誘致されて工場を建設し、地元の人達ばかりでなく多くの外国人が甲州に流入した。筆者の住む山梨市にもNECの工場があり、一時は市の人口が現在の2倍(約6万人)にまで膨れ上がったが、バブルの崩壊とともに工場は撤収され、多くの人々が去って行った。外来人たちも大部分は去って行ったが、定年間近の人達は甲州の環境、人間関係の良さ、土地の安さ、などを考慮してそのまま甲州に住みついてしまう人も出て来た。彼等も土着民と同様に保守的な雰囲気と同調してだんだん本来の甲州人に同化していくのだろう。

この事実を反対側から見れば、定年後に甲州に住むには良いが、ここで大もうけをして一旗揚げる心意気の人たちにとって、甲州は必ずしも良い環境の土地ではないと言える。何故なら日本の経済を動かすような産業はないし、人口は少ないし、若者が自分の将来の夢を託せるほど有望な未来が見えないからである。

2. 甲州人の将来

「曇りガラスを手で拭いて、あなた明日が見えますか？」と言うのは、耳鼻いんこう科で鼻の検査をするときに鼻の穴を上に向けるのと同じ格好をして歌う大川栄作の「山茶花の宿」の一節であるが、曇りガラスを手で拭いても、磨き粉を付けて拭いても見えるようにはならないのと同様に、筆者には甲州の将来が鮮明には見えてこない。

墓に向かってまっしぐらの我々の年代にとっては和気あいあいとした雰囲気、縁側で日向ぼっこをしているような甲州は住み心地のよい場所ではあるが、将来ここを生活の場として子供を育て人生を全うしようとする若者たちにとって本当に甲州は理想の場所だろうか？その疑問に答えるには人生の理想は何であるかという少々面倒くさい哲学論議をしなくてはならない。もっと単純に言う

と、グリム童話や白雪姫の話で最後は「王子様とお姫様はその後仲良く平和に暮らしたとき」で終わるが、平和に仲良く暮らすのは誰しもが望む人生の目標、または理想の一つであろう。その意味で甲州は良い居住環境を与えている数少ない国であることは事実である。しかし、他の土地より住み良さそうだから甲州は良いところであるというのは消去法的な選択肢で、甲州が若者に希望を与える「はちみつとミルクの満てる国」たらんとするには何か物足りない。電車で甲府駅前に降り立ったとき、ここはゴーストタウンではないかと思まごうばかりのシャッター街が続くのを見て甲州人として悲しくなる。

この論文の終わりに当たり、筆者の独断と偏見に満ちたより良き甲州にするための提案をしたい。この提案はそれを実行したからと言って特效薬みたいにすぐ効くものではないが、漢方薬的に何年かまたは何十年か先に効果が出るだろうと確信している。

甲州ばかりでなく日本の将来が我々の次世代と言うよりは次々世代以降に懸かっていることは誰でも考えることであるが、甲州ほどその必要性に駆られている国は少ない。甲州の人口減少はその魅力の減少に比例しているのではないか？人口増加のために生殖能力の衰えた我々が幾ら努力しても物理的、生理的に無理であるが、我々の努力によって若者に魅力のある甲州を作り出すことは不可能ではない。その具体策を筆者が提案するには余りに影響力が少ないため政治力、経済力のある方々にお願いしたいのは、先ず若者を甲州に定着させるような方策である。例えば中央線に快速電車を走らせ甲府から都心までが通勤圏内となったら、甲州の居住環境から考えて人口増加になろう。ハードは無理としてもソフト関係の企業を好条件で甲州に誘致したらどうだろうか？老齢化のために遊休地となっている農地に好条件で農業を希望する若者に解放したらどうだろうか？観光誘致ももっと充実できる筈だ。考えれば泉のように色々のアイデアが出てくるはずである。

幸いにこのHPをご覧の方々の中には甲州をさらに魅力ある国にする影響力を持つ仲間がいるので、その方々にお願いして甲州を魅力ある国に育てて頂きたい。筆者も金と手は出さないまでも微力ながらお手伝いできると思う。

長い間、飽きもせずこの与太噺をお読みいただき感謝に堪えない。竜頭蛇尾という言葉があるが自分で読み直してみても、こりゃあ、龍頭ダボラだと恥ずかしくなる。

6日目が終了して、7日目はゆっくりお休みとすることにした。

完